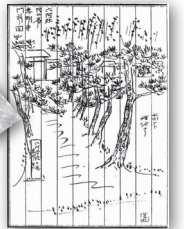
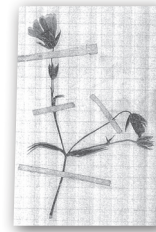


# 庭の荷風の庭



荷風の文芸空間に“理系感覚”という  
一本の補助線を引いてみる

訪問者 坂崎 重盛

## 冬の花 小岩 市川 本八幡

岩波文庫『荷風随筆集』(上)に収録されている「葛飾土産」の末尾の部は「向島」。この作品も「水のがれ」と同様、文庫版で四頁という短文。

思えば荷風は、この、戦後の「向島」の文章の前、昭和二年にやはり「向島」と題する比較的長文(十八頁分)の短章をしたためている。

二度目の「向島」の記は、昭和三十四年、散人が葛飾の地、八幡の自邸で急死する年に発表された、生前最後の随筆となった。

この頃、戦後の日本は、闇雲な経済成長優先で環境破壊なぞ頭の片隅にもなく、隅田川も沿岸の工場の廃液などで汚れによこれ、両国・柳橋の料亭などの箆笥の金具が川から発生するメタンガス(?)で錆びてしまふ、と話題になったりした。

そんな時代背景、散人の「向島」は、こう書き出される。

隅田川の水はいよいよ濁りいよいよ悪臭をさえ放つようになってしまったので、その後わたくしは

るでしようね。

水練場といえば、戦後すぐぼくが小学生のころ(昭和二十五、六年ころ)、江戸川区平井の荒川沿いには夏ともなれば木枠で囲まれた水練場があり、ここで水泳の真似事などをして遊んだりした。このころ、わずかな一時、東京の川も汚れてなかったのだ。

散人の向島の思い出に戻ろう。

西洋から帰って来てまだ間もない頃のことである。以前日本にいた頃、柳橋で親しくなった女から、わたくしは突然手紙を貰い、番地を尋ねて行くと、昔から妾宅なぞの多くある堤下の静な町である。

散人、三十を越すか越さない身、当然のこと向島から、「すぐさま女をさそい出して浅草公園へ夕飯をたべに行った」とか。

いずれにしても山の手から下町へ出て隅田の水を渡って逢いに行くのがいかにも詩のように美しく思われた。



明治が大正の頃に撮影された芸者さん(?)の「二百三高地。的な髪型に水着姿

芸妓さんたちが隅田川の水練場に!? いままでいえば人気アイドルが出そろって水着で大はしゃぎ、みたいなものでしょ。そりゃ、見物人もでて、にぎやかに

一度も河船には乗らないようになったが、思い返すとこの河水も明治大正の頃には綺麗であった。その頃、両国の川下には葭簀張の水練場が四、五軒も並んでいて、夕方近くには柳橋あたりの芸者が泳ぎに来たくらいで、かなり賑かなものであった。